

- Amir Hamzah 1990. *Buah Rindu*. Jakarta: Dian Rakyat.
- Chairil Anwar 1987. *Deru Campur Debu*. Jakarta: Dian Rakyat.
- Chairil Anwar 1989. *Kerikil Tajam dan Yang Terampas dan Yang Putus*. Jakarta: Dian Rakyat.
- Edizal 2000. *Takuboku Ishikawa dan Segenggam Pasir*. Padang: Kayu Pasak.
- 舟田京子、岩城之徳 1986. 「日印尼対訳石川啄木秀歌鑑賞」『国際関係研究』第7巻第2号.
日本大学.
- 舟田京子、岩城之徳 1987. 「日印尼対訳石川啄木秀歌鑑賞 (二)」『国際関係研究』第7巻
第3号. 日本大学.
- 舟田京子、岩城之徳 1987. 「日印尼対訳石川啄木秀歌鑑賞 (三)」『国際関係研究』第8巻
第1号. 日本大学.
- 岩城之徳 1985. 『啄木歌集全歌評釈』筑摩書房.
- Jassin, H. B. 1987. *Pujangga Baru, Prosa dan Puisi*. Jakarta: Haji Masa Agung.
- Jassin, H. B. 1987. *Gema Tanah Air, Prosa dan Puisi*. Jakarta: Balai Pustaka.
- Rendra 1981. *Blues Untuk Bonnie*. Jakarta: Pustaka Jaya.
- Rendra 1986. *Ballada Orang-Orang Tercinta*. Jakarta: Pustaka Jaya.
- Rendra 1990. *Empat Kumpulan Sajak*. Jakarta: Pustaka Jaya.
- Ruscitadewi 1999. *Hana Bira*. Bali: Yayasan Bali Anyar.
- Toto Sudarto Bachtiar 1977. *Suara*. Jakarta: Balai Pustaka.

5. まとめ

年齢、職業などが異なった種々のインドネシア人が日本を色々な角度から見ている。若年層にとり日本はテレビゲーム、コミックなどの生産国、成人には経済大国、老年には日本軍政時代の日本の印象が強い。これらの物質文化面や軍国主義時代の日本に関してはインドネシア人のよく知るところであるが、日本人の精神面のことはあまり知られていない。そこでインドネシア人がどの程度日本の精神面の事を知り、理解できるのか文学を取り上げ検証した。ここでは日本の文学、特に石川啄木の歌を通し、インドネシア人が考える日本文化、インドネシアとの共通性を不十分ではあるが論じてきた。

インドネシアと日本では自然現象など異なる点があり、これらの部分での、日本人が言葉で表現しかねる細かい心の機微、例えば雪が日本人に与える精神的影響などはインドネシア人に理解しがたいであろう。しかし啄木の生きた明治時代後半の社会世相、すなわち社会全体の貧困、政府による思想統制という中で人の生き方、思考には大いに共通性があり、翻訳上の問題点は拭いきれないが、啄木の歌はインドネシア人には共感され、受け入れられることが明らかとなった。

2 国間相互理解のために、今後は経済面ばかりでなく文化面、特に文学、芸術を通し両国の精神面で、より深い友好関係を結んでいくことが必要であろう。

注

- (1) 日本語訳は逐次訳であり、インドネシア語と日本語の語順が異なるため不自然な訳になっている。
- (2) 1965年9月30日から10月1日にかけて大統領親衛隊長が指揮した軍事行動で、この決起軍鎮圧後対共産党弾圧が始まった。
- (3) ある王の史賦で数百連から成るため、その一部を取り上げた。

参考文献

- Alisjahbana S.T. 1985. *Puisi Lama*. Jakarta: Dian Rakyat.
 Amir Hamzah 1985. *Nyanyi Sunyi*. Jakarta: Dian Rakyat.

Gigikau tunjang berembang,
Ridapkau cucutan atap.

4 - 5. SONETA

ヨーロッパ起源の14行詩で、4・4・3・3行の形式をとる。通常はabab-bcbc-dde-aaeのような脚韻を踏む。

例： Hijau tampaknya Bukit Barisan
Berpuncak Tanggamus dengan Singgalang
Putuslah nyawa hilanglah badan
Lamun hati terkenal pulang

Gunung tinggi diliputi awan
Berteduh langit malam dan siang
Terdengar kampung memanggil taulan
Rasakan hancur tulang belulang

Habislah tahun berganti zaman
Badan merantau sakit dan senang
Membawakan diri untung dan malang

Di tengah malam terjaga badan
Terkenang bapak sudah berpulang
Diteduhi selasih, kemboja sebatang

これは形式はソネタであるが、初めの2連はそれぞれ最初の2行が自然を歌い、後ろの2行で本意を述べているので、PANTUNとも言える。

上記の詩形式以外の多く、特に現代詩は上記のような定型詩でなく自由詩である。しかしこれら自由詩の中にもマレー（インドネシア）古来の定型詩PANTUNの形式に倣ったものが多い。

Barang siapa meninggalkan sembahyang,
Seperti rumah tiada bertiang.

Apabila orang yang banyak tidur,
Sia-sia sahajalah umur.

4 - 4 . MANTRA

宗教的行事の時朗読するもので、一種の呪文の要素を含む。1連は何行から構成されていてもよく、朗読者の思いが強いと長文化する。同じ内容を言葉を変えて表現し、同音の単語を並べ、音を繰り返す。また日常言葉ではあるが、神聖なる語を用いる。以下に、鶏を餌に鰐を捕獲する時に朗読する Mantra を記す。

Hai, si Jambu Rakat, sambut pekiriman,
Puteri Runduk di gunung Ledang,
Ambacang masak sebiji bulat,
Penyikat tujuh penyikat,
Pengarang tujuh pengarang,
Diorak dikumbang jangan,
Lulur lalu ditelan,
Kalau tidak kau sambut,
Dua hari, jangan ketiga,
Mati mampek mati mawai
Nati terdadai pangkalan tambang.

Kalau kau sambut,
Ke darat kau dapat makan,
Ke laut kau dapat minum,
Aku tahu asalkau jadi,
Tulang buku tebu asalkau jadi,
Darahkau gula, dadakau upih,

Raja di desa negeri Kembayat,
Dikarang fakir dijadikan hikayat,
Dibuatkan syair serta berniat.

Adalah raja sebuah negeri,
Sultan Agus bijak bestari,
Asalnya baginda raja yang bahari,
Melimpahkan pada dagang biaperi.

Kabarnya orang empunya termasa,
Baginda itulah raja perkasa,
Tiadalah ia merasai susah,
Entahlah kepada esok dan lusa.

Seri paduka Sultan bestari,
Setelah ia sudah beristeri,
Beberapa bulan beberapa hari,
Hamillah puteri permaisuri.

Demi ditentang duli mahkota,
Mangkinlah hati bertambah cinta,
Laksana mendapat bukit permata,
Menentang isterinya hamil serta.

4-3. GRINDAM

インドのタミルを起源とする教訓を表わす2行詩。主文と副文から成る複文で、1行目に条件、2行目に答えという構成でできている。これも音を重要視するためリズムは一定ではない。1連ではなく何連かで構成されることが多い。

例： Barang siapa yang sudah besar,
janganlah kelakuannya membuat kasar.

4. インドネシアの詩の形式

啄木の歌は原則的に五七五七七の3行詩であり、インドネシア語に翻訳する場合、日本人であれば啄木特有の3行詩にこだわりを持ってしまいが、インドネシアには3行詩という形式はない。インドネシア人による「一握の砂」の翻訳において、「原文と同じ3行のままではたどたどしくなり、美的情感が薄れると感じたので、インドネシア人が十分に鑑賞し味わう事ができるよう、4行以上の訳にした。」とインドネシア人訳者は述べている。

次にインドネシアの詩の形式にはどのようなものがあるか記述する。

4-1. PANTUN

伝統的マレーの4行詩。一般的に各行4語で8-10音節から成る。1行目と3行目、2行目と4行目に文字あるいは音の脚韻を踏む。1連4行(abab)が原則であるが例外的に6行(abcabc)や8行(abcdabcd)という形態もある。言葉の意味より音を重視し、最初の2行は飾りで後ろの2行に詩の本意を置く。この本意の部分は格言やことわざになることもある。

例： Air dalam bertambah dalam
 Hujan di hulu belum lagi teduh
 Hati dendam bertambah dendam
 Dendam dahulu belum lagi sembuh

4-2. SYAIR

アラブを起源とする叙事詩の1形式。4行から成る連を数連から数百重ねる。各行4語の自立語と、付属語で8-12音節から成る。各連の4行は同一の脚韻を踏む(aaaa)。民話を元にする民歌、歴史を元にする史賦、韻文物語である叙歌の3種類があり、朗読される。このように主役、背景、流れが必要なため、1連だけでは成立しない。また長くなる場合でも脚韻を踏むため、リズム、音、意味を完璧にするのは困難である。

例： Dengarlah kisah suatu riwayat,⁽³⁾

いのするものは一切禁止され、言論の自由もままならなかった。そういう点で啄木の時代の日本も思想統制が厳しく、大逆事件などが起こり、スハルト政権下のインドネシアと共通性があると言えよう。そのような環境の中で創られた啄木の歌にはインドネシア人の理解、共感を呼ぶものが多い。

例 1 :

赤紙の表紙手擦れし
国禁の
書を行季の底にさがす日

terkencang akan hari
cari buku bersampul merah yang terlarang
yang t'lah berpindah-pindah tangan
di dasar kopor (インドネシア人訳)

張り詰められた日
禁止の赤い表紙の本を探す
既に何人もの手を渡った物を
鞆の底で

例 2 :

売ることを差し止められし
本の著者に
路にて会へる秋の朝かな

bersua di tengah jalan sama
penulis yang bukunya
dilarang terbit
pagi bermusim gugur
(インドネシア人訳)

路の途中で会った
本の著者に
出版禁止の本の
秋の朝に

インドネシア人にとり日本は先進国であり経済大国である。しかし日本の文学作品を見ると多少文化的に異なる点があるものの、東洋的思考、生活様式など共通する面も多く、身近に感じ親しみを持っているのではないだろうか。

pukul dua tengah malam
musim rontok (インドネシア人訳)

真夜中の2時
秋の

ここでは桂首相 (perdana menteri Katsura) と訳しているが、この人物が当時国民の思想統制を行っており、啄木の非難の対象であった抑圧的政府の代表者であることを認識していないと、この歌の真意を捉えることができない。

以上のような日本の歴史、自然現象などを含む文化を知らずに詩歌を鑑賞すると日本人作者の本来の意図を汲むことができにくくなる。一方翻訳する側にとり、全てを把握していても短い詩の形式の中でそれを表現することはできない。これはインドネシア語の作品を日本語に翻訳する場合でも同様のことが言える。否インドネシア語ばかりでなく全ての異なる言語間での翻訳に当てはまることである。

一方多少のニュアンスの食い違いや微妙な感情表現の違いが表現できないが、根底にある東洋的思想、文化には共通点が多く、互いに理解し合える部分も多い。筆者がインドネシアの農村を訪れた時、30年程前の日本の匂いをそこに感じ、インドネシアも日本も同じ東洋であることを再認識した経験を持つ。

啄木の描く貧困の中での望郷の想い、自分自身への失望感、これはインドネシア人にとって大いに共感できるのではないだろうか。「一握の砂」のインドネシア語訳をしたインドネシア人であるエディザル氏も次のように語っている。「啄木の歌には彼の生活に常に付きまとった「寂しさ」「哀れさ」が織り込まれている。まるで啄木が悲哀に満ちた詩を通し、当時のあまりにも不幸な、そしてわずらわしい事の繰り返しである人生に、この世に生まれてきたことすら嘆く貧しい人々とその心情を共有しようとしているかのように感じられる。」また政治的視野を持って歌った詩に関し、「当時の社会体制の中で不当な扱いを受け不運な境遇に泣く多くの人々を思った彼は心を動かされた。そして抑圧された人々のために先頭に立ってその不平等を訴えた。彼のそうした言動は民主主義が未だ雲の上にあり、一般市民にとって手の届かないものであった当時の日本においては驚異の目を持って迎えられた。私にはこうした啄木の姿はスハルト政権から脱却し、新しい公平な社会を求め、その第一歩を踏み出したばかりの現インドネシアの国民の姿と重なって見える。」と述べている。

スハルト政権下では9.30事件⁽²⁾の影響により、共産主義、社会主義的匂

雪の吹き入る停車場に
われ見送りし妻の眉かな

このように雪が情景に出てくる歌では、イリアン・ジャヤの山岳地帯の一部にしか雪の降らないインドネシアに生まれ育ったインドネシア人にとって吹雪が啄木のつらく悲しい気持ちを助長するものであるということを理解しがたいであろう。

大といふ字を百あまり
砂に書き
死ぬことをやめて帰り来たれり

habis kupahat	書いた後
di pasir	砂に
seratus kanji "dai"	「大」という漢字を100回
pulang jua akhirnya	帰ることにした
enyahkan kematian	死ぬことをやめて
(インドネシア人訳)	

この歌で日本人は「大」という字を100回程書き、自分は偉大な人間であると自分自身に言い聞かせて死ぬことを思いとどまった、という内容であることを理解できる。しかし漢字のないインドネシアで上記のように"dai"と訳しても、これが何を意図するのか分からず、結局歌全体の意味を把握できない。

やとばかり
桂首相に手とられし夢みて覚めぬ
秋の夜の二時

terbangun atas impian	夢で目覚めた
meronta diri atas	自身にふりかかった
tangkapan tangan perdana menteri Katsura	桂首相の手に捕らえられた

ganjil jalan yang kutapaki
ah, pilunya

bila lagi bersedih
lamunanku mengunjungimu

11 sobat yang beri diri nasi
sobat itu ditentang diri
menyedihkan ini sifat

1, 2, 9 番の pilunya は形容詞で悲しい、悲嘆にくれるという意味であり、3, 5, 7, 8 番の kepiluan は名詞で悲しさ、悲嘆の意である。4 の sedihnya は心配を伴う悲しみで、6, 10 の bersedih は動詞で悲しむの意。11 の menyedihkan は他動詞で悲しませる、悲観する、心配する、残念と思わせるの意味を持つ。

邦人の顔たへがたく楽しげに
目にうつる日なり
家にこもらむ

上記の歌は翻訳するにあたり「日本人の顔が耐え難いほど卑しく見えるので自分は家にこもっている。」と訳す事になるが、なぜ日本人の顔が卑しく見えるのか、その背景は、朝鮮国を日本が植民地とした大事件が起こったにもかかわらず日本人が平気な顔で楽しそうにしているのを見て腹が立った気持ちを表現したものであることはインドネシア人には理解できないであろう。

誰そ我に
ピストルにても撃つよかし
伊藤のごとく死にて見せなむ

上記の歌で伊藤とは伊藤博文のことであり、当時の日本の社会状況を知らないと真意が伝わらない。このように直訳の意味は理解できても、背景が分からず深い意味を読み取れない歌もある。

子を負ひて

なしに鑑賞している詩歌をこのように分析し、日本独特の日本観というものを、特に微妙にニュアンスの異なる形容詞の中に感じ取ることができた。

3. インドネシア人による日本文学のインドネシア語訳の中における日本

前章であげた「かなし」に関し、インドネシア人がインドネシア語で表現すると下記の通りである。

- | | |
|--|--|
| 1 dengan air liur
di sebhongkah tanah
lukisi wajah bunda
lagi berurai tangis
ah, betapa <u>pilunya</u> | 2 dicopot sumbat
bau dawat baru
menyusupi perut yang keroncongan
betapa <u>pilunya</u> |
| 3 bagai bening terpampang
segala hari depan
<u>kepiluan</u> ini
tak juga pergi beranjak | 4 suatu pagi
bangkit dari <u>sedihnya</u> mimpi
bau sup yang lagi dimasak
merasuk hidung |
| 5 di hari yang bagai lagi gering
dirasuki kerinduan
kampung halaman membayang
asap ke langit biru datangkan <u>kepiluan</u> | 6 bagai diburu dengan batu
<u>bersedih</u> tinggalkan kampung halaman
tiada waktu
untuk berlupa |
| 7 sinar rembulan
sisihkan hujan
cukupan kuyupi genteng atap
pantulkan <u>kepiluan</u> disana-sini | 8 di hamparan dunia ini
<u>kepiluan</u> diri dan sinar rembulan
'kan jadi malam musim gugur
luas membentang |
| 9 entah sudah berapa banyak
tekad hendak mempusing saja | 10 bagai anak gunung
yang rindukan gunung |

インドネシアから見た日本文化

- | | |
|--|--|
| <p>3 何もかも行末の事みゆるごとき
この<u>かなしみ</u>は
拭ひあへずも</p> | <p>4 ある朝の<u>かなしき</u>夢のさめぎはに
鼻に入り来し
味噌を煮る香よ</p> |
| <p>5 病のごと
思郷のころ湧く日なり
目にあをぞらの煙<u>かなしも</u></p> | <p>6 石をもて追はるるごとく
ふるさとを出で<u>かなしみ</u>
消ゆる時なし</p> |
| <p>7 雨後の月
ほどよく濡れし屋根瓦の
そのところどころ光る<u>かなしさ</u></p> | <p>8 あめつちに
わが<u>悲しみ</u>と月光と
あまねき秋の夜になれりけり</p> |
| <p>9 いくたびか死なむとしては
死なざりし
わが来しかたのをかしく<u>悲し</u></p> | <p>10 山の子の
山を思うがごとくにも
<u>かなしき</u>時は君を思へり</p> |
| <p>11 友われに飯を与へき
その友に背きし我の
性の<u>かなしさ</u></p> | |

同じ「かなし」という言葉であるが日本人の理解する1の「かなし」は悲しく情けないの意。2は情けなく惨めの意、3は悔恨の悲しさ、4は純粹に悲しいの意、5は懐かしいの意、6は故郷喪失の慟哭、悔しさの意、7はいとおしいの意、8は経験してきた悲しみ、9はもの悲しいの意、10は寂しい、11は情けなさ、哀れさの意である。

以上のように日本人の表現する「かなし」はその時々で多種多様な意味を持つ。同じ土壌に育った日本人同士は説明を加えなくても各歌の中の「かなし」の持つそれぞれの微妙な意味が理解できる。しかしこの微妙なニュアンスの違いをインドネシア語の単語の中に見出し、インドネシア語でこの日本人独特の感情を表現するのは難しい。というのも日本人歌人が表現している意味合いを持つ単語を見出せないからである。日本文学を翻訳するにあたり日常深い考え

adik perempuan yang
t'lah lewatkan masa naik pelaminan
(インドネシア人訳)

妹の
婚期を過ぎてしまった

例 2 :

我に似し友の二人よ
一人は死に
一人は牢を出でて今病む

Dua sahabatku, yang senasib denganku
Seorang wafat, dan
Seorang lagi jatuh sakit setelah ke luar penjara
(筆者訳)

私と同じ運命の2人の友
一人は亡くなり、そして
もう一人は牢を出た後病んでいる

oi, sobat berdua yang
bagai aku saja
seorang t'lah berkalang tanah
lainnya keluar bui
Tergeletak kini lagi gering
(インドネシア人訳)

ああ、2人の友よ
まるで私のように
1人は土に戻り
もう一人は牢を出て
今病んでいる

しかしながら啄木が自らの心理を描いている詩の中には日本人独特の思想が根底にあるものが多い。これをいかにインドネシアの人々に伝えるかが問題となる。啄木の歌の中で特に多く使われている形容詞の1つに「かなし」がある。この語は「一握の砂」全551首中68首に使われている。その一例をあげると下記の通りである。

1 ひと塊の土に涎し
泣く母の肖顔つくりぬ
かなしくもあるか

2 新しきインクのにほひ
栓抜けば
餓ゑたる腹に沁むがかなしも

を比較しつつ、インドネシア人の日本文化に対する理解度を検証してみたい。また「一握の砂」で使われている詩の形態とインドネシアの詩形態の比較を行う。

2. 日本人による日本文学のインドネシア語訳の中における日本観

日本人の啄木詩歌の中における日本観はまさに啄木が表現したもの、そのものであり説明の余地は無い。しかし日本人が日本文学をインドネシア語に訳す場合、先ず考えるのはその文学の中で表現されている日本人の心をインドネシア人が理解できるかどうかということである。小説の場合は、受け入れられるか否かは別として、長い文脈の中である程度内容を把握する事は可能である。しかし詩歌は短い文の中で多くのことを表現している所以他们にとって理解は困難となる。まして啄木の「一握の砂」は五七五七七調の短歌形式をとっているので、単に直訳しただけでは理解は不可能に近い。

次に考える事は原文を損なうことなく3行詩の短歌形式にするか、あるいは形式に拘らず内容重視で翻訳するかを選択である。筆者の場合は原文の持ち味をできる限り損なうことなく3行詩にこだわり、しかしながらある程度原文とは異なってもインドネシア人が理解しやすい単語を選んで翻訳を行った。

事実を歌ったものは日本人独特の心理描写をすることなく直訳が行える。

例1：

朝はやく
婚期過ぎし妹の
恋文めける文を読みりけり

Di pagi buta
Kubaca sepucuk surat cinta adik perempuan
Yang sudah kedaluwarsa (筆者訳)

早朝に⁽¹⁾
妹の1通の恋文を読んだ
既に婚期を過ぎてしまった妹の

dalam pagi mentah
terbaca sepertinya surat cinta

早朝に
恋文のようなものを偶然読んだ

インドネシアから見た日本文化

——石川啄木の歌を通して——

舟田 京子

"How does the Japanese culture appear to the Indonesian people?" requires a complex answer. By definition, culture is a very broad subject. It can be influenced and involved one's tradition, customs, religion, thought, educational background, literature, science, social life and economics. All of these can affect the definition of a single word "culture". When we look at each individual field, our impressions will vary with our age, profession, education, sex, experiences, and geographical locations.

Using literature to define culture, the literary work of "Ichiaku no Suna" by Takuboku Ishikawa presents an excellent example. By comparing the translation done by the Japanese and the Indonesian, I would like to clarify the understanding of the Indonesian people towards the Japanese culture. Then I introduce forms of Indonesian poems in chapter 3.

1. 前書き

「インドネシアから見た日本文化」とは何かという問いに即答する事はできない。なぜなら「文化」と言う語の持つ意味領域が広範囲に亘っているからである。伝統、慣習、宗教、思想、文学、教育、学問、社会生活、経済等々多くの分野を「文化」という言葉で表現できる。またこれらの分野を見ていく上で年齢、職業、教育、性別、経験、地理、地域等の違いにより見方も異なる。

今回はこれら多くの分野の中から文学を選択し、その中の日本の詩歌、石川啄木の「一握の砂」の翻訳から日本人による翻訳とインドネシア人による翻訳